

モダニストとダンテ イェイツと自動筆記

メタデータ	言語: jpn 出版者: 明治大学人文科学研究所 公開日: 2012-05-16 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 辻, 昌宏 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10291/11962

モダニストとダンテ
イエイツと自動筆記

辻 昌 宏

— *Abstract* —

Modernists and Dante---Yeats and automatic writing

TSUJI Masahiro

In this essay, I tried to verify the importance of the role of Mrs Yeats in automatic writing in comparison to the case of Beatrice's importance to Dante.

First, in case of Dante, Beatrice is transformed into a symbol of beauty and faith. But her role changed from *Vita Nova* to *Divina Commedia*. While *Vita Nova* is a collection of the poetry written when Dante was still young, adding explanations of how each poem is written, *Divina Commedia* is a new presentation of a world view, including purgatory.

What seems critically important when we compare Yeats' creative process with Dante's is that they both treat the dream as an essential part of their creativity. Dante narrated in *Vita Nova* that he not only encountered Beatrice but saw Beatrice eat his own heart in his dream.

On the other hand, Yeats was searching, for more than twenty years, for the proof of the existence of the soul after death. He attended séances and some secret societies etc.

Soon after he got married, his wife Georgie (later renamed George) made use of the technique of automatic writing in order to draw Yeats's attention away from his sentimental involvement with Maud Gonne and his daughter Iseult. It was so successful that Yeats and his wife continued to do automatic writing over the years and their collaboration created the brand new and original world view presented in *A Vision*.

In the process of the automatic writing, it was not George but the supposed instructor(s) that gave her the philosophical view of the world. But there are some reasons for suspecting that she was in conscious control throughout the automatic writing. First, her other-worldly "instructors" insisted on cutting Yeats off from his other occult associates and made him wholly dependent on her. Yeats was forbidden to enlist any other medium or to permit any third party to watch. Probably she tried hard to maintain their marriage life by drawing her husband's attention through a mysterious way of developing their world-view.

Their world vision has three main concepts.

1. civilization moves in cycles of two thousand years, heralded by a kind of messiah
2. the range of human personality can be represented by the 28 phases of the moon.
3. the individual soul, through a series of incarnations, passes through each of the phases

Although the 1925 version of *A Vision* had 305 pages, the manuscript of the sessions of the automatic writing amounts to thousands of pages.

Both Dante and Yeats created their own vision on the basis of the reality, arranging the preceding philosophies, and succeeded to express their own vision through their respective works.

《個人研究第2種》

モダニストとダンテ

イエイツと自動筆記

辻 昌 宏

本稿では、モダニストとダンテの連関のうち、W. B. イェイツとダンテの関係について、特に、創作において、親しい女性の存在がどう絡んでいたのかを、従来しばしば論じられてきたイエイツにとっての永遠の女性像たるモード・ゴンに注目するだけでなく、むしろイエイツ夫人の自動筆記 (automatic writing) の役割を中心に考察し、ダンテの創作におけるベアトリーチェ像の変遷と比較してみたい。

I. ダンテの『新生』

ダンテにおいて、ベアトリーチェが創造の源泉となったのは言うまでもないが、実際には、ベアトリーチェがどんな人物であったかはほとんど判っていない。今日ほぼ定説となっているところでは、フォルコ・ポルティナリーの娘ビーチェで、のちにシモーネ・バルディと結婚したが、1290年6月8日または6月19日に亡くなった(註1)。史実が極めてわずかしかり得ないだけでなく、ベアトリーチェの役割は、『新生』と『神曲』においては大きく異なる。そもそも『新生』の製作過程において、ベアトリーチェ像は変容をこうむったと考えられる。つまり、『新生』は、ダンテが若き日に書きためた詩(ソネット、パッラータなど)に、散文の詞書きを加えて、一つのまとまりをもった本に仕上げたものであるが、詞書きを書く時点と、詩を書いた時点の女性像にずれがあるように見えるのである。

それは、ある意味で、清新体 (dolce stil novo) の詩人であることからの発展的脱皮を示しているのである。『新生』と『神曲』の世界のへだたりは、詩人の飛躍的成長を信じなければ、同一人物によって書かれたとは信じがたいほどである。

イエイツとの比較で、重要と思われるのは、ベアトリーチェとの出会いだけでなく、『新生』の中で、ベアトリーチェを夢見ること、また、「恋する魂と雅び心に」というソネットを書くのだが、このソネットは、ダンテが自分の夢について語り、その夢解きを友人の詩人たちに求めるものであった。後述するが、イエイツが夫人ジョージとの共同作業によって築いた *A Vision* は自動筆記によって草稿は出来上がる。ダンテもイエイツも、非常に技巧的に凝った詩を書くのであるが、技巧という

モダニストとダンテ——イエイツと自動筆記

と詩人の意識的な営為のみが中心になる印象を与えてしまうが、二人とも、人間の無意識の領域、不可視の領域を、意識できるそれ、可視領域と同じかそれ以上に重視していたし、重視していることを作品上に十全に表現できた極めてまれな詩人であると言えることができるだろう。

ダンテにおけるベアトリーチェ像とイエイツにおける女性像は、それが作品に極めて強い影響を与えている点は共通しているのだが、決定的に異なる点がある。ダンテの場合、ベアトリーチェの実像を知りようがないため、あくまでダンテの作品におけるベアトリーチェ像の変化を辿ることしか出来ないのに対し、イエイツの場合は、モード・ゴンの自伝、モード・ゴンとイエイツの間で交わされた書簡集、モード・ゴンの娘イザーの書簡、近年はイエイツがその後結婚した夫人ジョージの伝記まで出版されているので、イエイツをめぐる女性たちの現実の姿と作品に表われた女性像（たとえば、イエイツの詩のなかで古代ギリシアのヘレネーという名で呼ばれる女性は、モード・ゴンをモデルとしている）の差異、変容を分析し、辿ることが可能である。

イエイツの『新生』からの影響が明らかな作品は、*Per Amica Silentia Lunae* であると僕は考えている。ここでは詳述しないが、テキスト上の照応、引用はもとより、イエイツがその時に抱えていた問題意識、とくに詩を書くに際しての方法論と、ダンテが *Vita Nova* で示した方法論との並行関係があるからである。また、両者ともに、詩と散文からなる書物という形式を持つという共通の特徴を持っている。

II. イエイツの『煉獄』

イエイツは、T. S. エリオットとは異なり、まとまったダンテ論を書いたことはない。しかし、だからといって、イエイツが詩人として、より非ダンテ的であったわけではない。ダンテの生き様、文体の変化、作品生成と女性との関係などを見ていくと、エリオットよりもイエイツのほうがはるかにダンテ的であると思える。

もっとも、詩や劇のタイトルで、直接ダンテに言及している、あるいはしていると思われるものは決して多くはない。劇の *Purgatory* と詩の 'Ego Dominus Tuus' が誰の目にもとまるものであろう。

いうまでもなく *Purgatory* とは煉獄のことで、ダンテの『神曲』の煉獄篇 *Purgatorio* を想起させる。しかし、これは読んでみると、ある老人と若者が、ある夫婦がはじめて結ばれる場面を窓越しにシルエットで見るといふ具合の話だ。実は、その夫婦は、老人の親で、二人は身分違いの恋をしている。女が高貴な家柄で、男は馬丁である。その二人が結ばれたのだが、二人の間に生まれた息子である老人は、二人の関係を呪っている。

女は子供を産んですぐに死んでしまい、男は女の家を食いつぶしてしまう。酔っぱらって火事を起こした日に、息子（老人）は父を殺す。さらに老人は、自分の血筋を断ち切るべく若者（老人の息子）を殺してしまう。しかし、それでもなお、災いの元となった二人が結ばれる場面は、繰り返されていく。

二人は死んで煉獄に行ったのだが、この劇の中では、煉獄の魂は、この世に帰ってきて、元の場所

に繰り返し現れる、という設定になっている。ここが、ダンテの煉獄篇と根本的に異なるところだ。ダンテの世界では、地獄はエルサレムの地下にあり、それを下っていくと地球の中心には、ルチーフエロ（墮天使）がいる。そこをさらに突き抜けて、地球の裏側へ到達すると、煉獄の島がある。つまり、煉獄は南半球にあるのだが、天国は煉獄から空に上っていった方角にある。こうして、極めて具体的な場所に、死者の霊は位置しているのである。

もともと、煉獄という場所は、12世紀末まで存在せず、それが存在するとされる様々な言説が生じて約100年が経過したところで、ダンテが『煉獄篇』をものして、西欧の精神世界に確固たる位置を占めるようになったのだが、それでも、16世紀の宗教改革に際しては、プロテスタント側は、聖書に根拠を持たぬ「第三の場所」として、それを信ずるものを執拗に攻撃した（註2）。

アイルランドの Abbey Theatre で上演されると承知しつつ、イエイツは、独自の煉獄（の魂）観を披瀝したわけだ。初演は1938年8月10日で、イエイツの亡くなる前年のことである。イエイツは、晩年になっても、社会的に丸くならうとはしない。登場人物の老人は ‘The souls in Purgatory that come back / To habitations and familiar spots（煉獄の魂は、住みかや慣れ親しんだ場所に戻ってくる）’ と言う。

こうした大胆な煉獄観のため、*Irish Times* では宗教的論争が展開された（註3）。結局は、その論争は翌月9月には、落ち着きを見せ、イエイツ寄りに収束して、彼もほっとするのであるが（註4）。

イエイツの劇に描かれた煉獄の魂は、現世のなじみの場所に戻って、現世の行為を繰り返しているわけだが、イエイツはそのことに関しては、日本の能やその他の国の民話にそのような例はたくさんあるとしている。

では、実際、イエイツはどのような煉獄観、あるいは死後の魂に対する考えを持っていたのだろうか。

その点に関して、最も明確に述べている資料の一つは、晩年のイエイツの恋人・友人であった Dorothy Wellesley の覚書きである（註5）。この覚書きが収められた本のタイトルは、*Letters on Poetry from W.B. Yeats to Dorothy Wellesley* とあって、イエイツが Wellesley に宛てた手紙が収められているのだが、その中に ‘Comments and Conversations’ という章があって、イエイツが彼女を1938年7月、9月と10月に訪れたときにものしたメモが提供されている。

それによると、イエイツは、「個人の不滅性はもう疑う余地なく証明された」と述べたという。彼女自身は、オカルトに興味は大いにあるが、信じているわけではないと断っている。

さらに、彼女は、これらの主題について何時間もイエイツと論じあったという。やや長くなるが引用する。

彼（イエイツ）はかなり激しく死後の生について語っていた。とうとう私（ドロシー）は尋ねた。「死の直後にはどんなことが起こると信じているの？」彼は答えた、「人は死ぬと、自分が死んだことが自覚できないんだ」。私、「どんな状態にいるの？」W.B.Y.「半ば意識のある状態だ」私は言った、「目覚めるのと、眠っているの間のような？」W.B.Y.「そう。」私「この

状態はどれくらい続くの？」W.B.Y.「おそらく、約20年」「その後は」と私は聞いた、「どうなるの？」彼は答えた、「再び、煉獄の時期だ。その時期はこの世にいた時におかした罪による」また私が尋ねた「その後は？」私は、彼の言葉そのものは覚えていないけれど、彼は魂が神のところへ帰るという意味のことを言った。私は言った「そう、わたしには、あなたが、私たちをローマ・カトリックの大きな腕の中にせきたてて返すように見えるわ」彼はむろん、アイリッシュ・プロテスタントだった。私は大胆にも尋ねたのだが、彼の返事は、快活な笑いのみだった（註6）。

ドロシーが不思議がっているように、イエイツの考えは、カトリックのオーソドックスなドグマと重なる部分もある。しかし、死んでいるのが自覚できない中途半端な状態が20年も続くというのは、明らかにダンテともカトリック信仰とも異なる点だ。

そもそも、このドロシー・ウェズレーの覚書きがどれくらい信用出来るものか、ということも問題であるが、僕自身は、かなり信用してよいのではないかと考えている。理由は、3つほどあげることができるだろう。

1. 彼女の叙述の仕方は、この部分以外も落ち着いた書きぶりであること。自分の意見とイエイツの意見を区別している、イエイツの直接的な言葉と、話の趣旨を区別して述べていることにも、それがうかがえよう。
2. イエイツおよび娘のアンとも手紙を継続的に手紙を交わしていること。つまり、イエイツ父娘との信頼関係があると想定されること。

さらに重要であるのが、

3. イエイツが以前に著した著作 *A Vision* (1925, 1937) で述べられた死後の魂に関する考えと矛盾しないこと、である。

イエイツは、*A Vision* で、死後の魂がどうなると述べているのだろうか？

だが、それを見る前に、*A Vision* 成立に至る複雑怪奇なプロセスを、われわれは検討しておく必要があるだろう。

Ⅲ. イエイツ夫妻の *A Vision*

A Vision はそもそも、イエイツが結婚した直後に夫人が自動筆記を始めて、それは夫人が勝手に語ったものではなく、instructors が秘教的な思想を夫人を一種の霊媒として伝達するのを書き留めて、整理したものとされている。その instructors が何者であるのかは不明だ。

そのため、長らくイエイツ研究者以外には、敬して遠ざけられてきた憾みがある。これは無理もないことで、イエイツの instructors との関係は、通常の意味での実証性がまるでないからだ。素朴に instructors が誰なのか、本当に存在するかを議論してしまうと、UFO論議のようになりかねないだろう。研究者が通常の手続きとして踏むことになっている手続きを、まったく欠いており、研究者

の側からは、それが書かれたプロセスに関する議論を棚上げにして結果をそのまま受け取るしかないという書物になってしまっているように見えるからだ。つまり、宗教におけるドグマに極めて近いものになっているのだ。宗教の場合も、三位一体のようにいったん教義（ドグマ）になってしまえば、その内容の当否を論じることは、その宗教の内部では出来ないのである。

しかし、このイエイツのドグマティックな書物には、近年になって、新しい光が当るようになった。それには、*A Vision* の共著者とも言うべきジョージ夫人についての情報が格段に明らかになったこと、また、フェミニズム研究の進展で女性に対する考え方がかつてと較べて（というのもまことに大雑把で恐縮だが）、はるかに多様になったこと、そしてジョージ夫人の伝記と深く関わることだが、*A Vision* のもととなった二人の自動筆記のセッションの草稿が出版され、*A Vision* には収められなかった部分の自動筆記の内容が明らかになってきたことが背景としてある。

一般論はさておき、この書物に対するジョージの貢献に関しては見方が変わりつつあるが、その見方が必ずしも一致しているわけではない。

まずは、ジョージ夫人の来歴を、彼女の初の本格的伝記を著した Ann Saddlemyer の *Becoming George: The Life of Mrs W.B. Yeats* によって見ていくことにしよう。ジョージがイエイツと知り合うのには、Olivier and Dorothy Shakespeare 母娘が一役かっているが、実は、この二人はジョージとだけでなく、ジョージの母ネリーと深いかわりを持っている。

ネリーは、もともと、オカルトに興味を持っていて、そこでオリヴィアと接点があったのだが、ネリーはジョージの父ギルバートと別れ、ギルバートの死後14ヶ月後の1911年2月1日に、オリヴィアの兄（弟）ハリー・タッカーと再婚している。オリヴィア&ドロシー母娘は証人になっている（註7）。

周知のごとく、ドロシーは後にエズラ・パウンドと結婚しているのだが、それは先の話で、ネリーとハリーの結婚を端緒として、ジョージとドロシーは親しくなり、1913年、14年には、一緒にイタリアを旅している。

イタリア関係でいえば、遡って1912年には、ロンドンで開催された未来派展およびマリネッティの講演会に、ジョージとドロシーは行っている可能性が高いという。さらに遡ってマリネッティが最初のマニフェストを1910年に朗読したロンドンの Lyceum Club も、ジョージは一時その会員であったらしいので、その朗読を聞いた可能性もあるという。

イギリスにやってきて間もなく、パウンドは1909年1月にオリヴィア・シェイクスピアに会い、その数週間後には娘ドロシーと出会っている。翌年、パウンドは、*The Spirit of Romance* を出版しているが、シェイクスピア家で、最終章の朗読会を開いている。ジョージはそれからほどなくして、ダンテの勉強に取り掛かり、1910年まず『天国篇』を読み、それから『煉獄篇』、『地獄篇』と通常とは逆の順序で『神曲』を読み進んだ。翌1911年には『新生』も読んだ（註8）。

パウンドはそもそもイエイツに会いたくて、イギリスにやってきたのだが、その目的はオリヴィア、ドロシー母娘の仲介で1909年5月に達せられ、パウンドとイエイツは急接近し、パウンドはイエイツの秘書のような形になっていく。

モダニストとダンテ——イエイツと自動筆記

しかし、ここで述べておかねばならないのは、イエイツとオリヴィア・シェイクスピアはもともとわけありの仲だということである。以前にも、おそらくは1903年前後に接近したことがあるのだが、この頃再び二人は接近していたと考えられる。

そんな時期に、ジョージははじめてイエイツに会ったのだが、ドロシーとパウンドはイエイツに 'Eagle' と 'Dante' というあだ名をつけていたのだ。ジョージはきわめてはっきりと、二人の出会いが1911年5月だったと繰り返しのべている。つまり、劇場やレクチャーの場で見かけたことはあったかもしれないが、シェイクスピア家で正式に紹介されたのは、11年の5月だったのである。ジョージ19歳、イエイツ46歳。

この前後、イエイツもジョージも、オカルトおよび降霊術の探求にいそしんでいる。ここで断っておかねばならないが、19世紀末から20世紀初頭にかけて、死後に魂がどうなるのか、死者の魂が、生者を通じて語る、即ち、生者をいわゆる霊媒として語ることがありえるのかどうかは、単にオカルト好きの話題ではなく、科学、哲学、宗教に真面目な関心を持つ人が大真面目に取り組んでいた問題だったのである（註9）。

ジョージは、降霊術の会に1912年頃から出ていたらしい。その会にイエイツも出ていたが、イエイツはあまりに 'critical' だからというので、お出入り禁止になってしまったことがある。

1913年には、神智学から分裂して人智学を唱えるルドルフ・シュタイナーがロンドンにやってきて講演をした。シュタイナーは、ある種の感性、意識をとぎすますことにより、霊的な世界が知覚できるようになると説いていた。ジョージは、神智学の祖とも言うべきマダム・ブラヴァツキーの著作は読んでいたが、神智学協会には入会していなかった。シュタイナーの講演の後、しばらくして、人智学協会のメンバーになっている。

1914年2月には、秘密結社 Golden Dawn のリーダーであった MacGregor Mathers の著した *The Kabbalah Unveiled* を購入している。これはカバラ、古代ヘブライ神秘哲学に関する3冊の書物を翻訳したものだという。

続いて、ヘルメス・トリスメギストスによるとされる著作のイタリア語版をローマで購入。トリスメギストスの書とされているのは、つまりは、紀元2世紀アレクサンドリアの錬金術、占星術、魔術についての本である。この本には（そしてこの本だけでなくジョージの本にはしばしば見られることだが）、多くの書き込みがある（註10）。

次に彼女が買ったのは、イタリア語版のピーコ・デッラ・ミランドラの著作で、彼女はこの中身をカバラと比較している。そして同時に、彼女は中世および近代の哲学者を読み進めている。即ち、16世紀のドイツの占星術師・哲学者コルネリウス・アグリッパの『秘密哲学』（*De occulta philosophia*）や近代ではヘーゲルやクロウチェまで読んでいる。アグリッパはルネサンスのドイツの哲学者で、世界を三つの界に分け、それを統一する世界靈魂を説いている。

こう見てくると、ジョージが自動筆記で instructors から伝授されたとする内容は、その到達点を知らぬままに、着々と準備が進められていたことになる。

ジョージは、宇宙・天体の動きが、人間の秩序に反映されていると考え、また、歴史は繰り返すと

考えていた。こうした思想は、彼女の占星術が相当に練達のものになっていたという事実からも裏づけられるが、実践と思想が伴っていたのである。しかし、その意味合いを考える際には、日本の現在にいる我々としては注意しなければならない。こういった思想や実践は、当時、相当の人が興味を持っていたとはいえ、一方で、キリスト教やカトリックの教義からは逸脱する部分を多分に持っている。もっとはっきり言えば、イエイツもそうだが、ジョージもキリスト教の教えを信じられなくなってしまったが、霊的存在を希求する熱意は多いにあったので、こういったオカルト研究や占星術に凝ってしまったのである。

ただし、カトリックの教義、トマス・アキナスの世界観に基本的にのっっていたダンテが全く異なる世界観なのかと言われれば、どの観点から見るかによるのである。『神曲』の『天国篇』などは、その宇宙観と人間の価値を密接に関連づけて叙述がなされており、比喩も幾何学を用いたものが少なくない。それとは全く異なる別の体系をイエイツ夫妻の *A Vision* は構築したわけだが、表面的な教義は異なるものの、宇宙・天体の動きと、人間の価値観の連関という括りで見れば、むしろ、イエイツの世界観は、他のモダニストの誰よりもダンテ的と言うことができるのである。

こうして、キリスト教の教えに満足していないがゆえにオカルト研究にいそしむ二人が、教会ではなくて、登記所で民事婚をあげたのは、当然といえば当然のことであった。もっとも、その雰囲気の意味なさから、ジョージは、後に、友人にはむしろ教会婚をすすめているのだが。

従来のイエイツの伝記、たとえば、Richard Ellman の *Yeats: The Man and the Masks* などでは、モード・ゴンにプロポーズして予想通り断られ、その養子イズー（実は娘なのだが、モード・ゴンの自伝では、あたかも姪を引き取ったかのように書いてあるので、Ellman が誤解したのだと思われる。モード・ゴンはイズーを、シングルマザーとして産んだのであるが、その後、別の男と結婚しそこで生まれた息子ショーンがイズーのことを率直に書くことに反対したのである）にプロポーズし、断られたあと、しばらくして、ジョージ・ハイド・リーズ (Georgie Hyde-Lees, のちに George と改名する、あるいはイエイツによって改名させられるので、拙論では混乱を避け、一貫してジョージと呼ぶ) と結婚して、とても幸せになり、数日後に自動筆記が始まったと記述してある (註11)。

しかし、これは、誤った記述というのが言い過ぎならば、極めてミスリーディングな叙述なのである。というのも、イエイツ夫妻は、結婚当初から、重大な危機に陥り、ジョージは、そのまま別れようかとまで思いつめたあげく、自動筆記という賭けに出たというのが真相に近いと思われるからだ。

イエイツが結婚したのは、1917年10月20日である。結婚直後、イエイツは身体の不調を訴える。しかも一週間たたぬうちにイズーに自分がどれほど不幸かと訴える手紙を書き、その返事が10月26日付けで、新婚夫妻の投宿するホテルに届くのである (註12)。10月29日付けのパトロン Lady Gregory宛ての手紙のなかでは、2日前まで (註13)、大変な鬱状態にあったことを認めている。三人の心を裏切ってしまった、と自らを責めていたというのだ。三人とは、ジョージ、イズー、彼自身であろう。

イエイツがイズーへの手紙のことを馬鹿正直に語ったことで、ジョージは大きなショックを受ける。モード・ゴンのことは知らぬものはなかったのだが、イエイツのイズーへの愛着がこれほど大き

モダニストとダンテ——イエイツと自動筆記

いと知らなかったのだ。ジョージは、別れることも考える。しかし、彼の関心を別の女から引き離し、自分と共通の関心へと向けるため、彼女は一つの賭けに出る。自動筆記を実践してみせたのである。イエイツは、たちまちのうちにこれに関心を向ける。ジョージは、これがでっちあげの (fake) 自動筆記であったことを認めている。イエイツが落ち着いたら、白状するつもりだったというのだ。

では、その後の延々と続いたセッション、新婚時代、一日二回数時間ずつ行われ、イエイツが質問し、ジョージが霊媒となって instructor が答えるという儀式に関してはどうなのか。イエイツの二巻本の伝記 *W.B. Yeats: A Life* を著わした R.F. Foster は慎重に断定的な態度を避けている。

一方、*Yeats's Ghosts* を著わし、イエイツの女性関係を精査した Brenda Madox は懐疑的である。即ち、すべて、ジョージが結婚生活の鍵を彼女が握るため、自動筆記を演じ続けたのではないかと推測している (註14)。後の *A Vision* の体系に組み込まれなかったプライベートな部分で、彼女は instructor を媒介して、二人の性的関係を満足させることが重要だと繰り返し指示を与えているのである。また、二つの円錐 (gyre) の交錯する体系を構築するわけだが、それ自体が非常に性的なシンボルであることも、草稿からは明らかになっている。Madox がジョージが意識的な営為として自動筆記 (そうなるともう自動とは言えないわけだが) を行っていたのではないかと疑う理由を3つあげている。

1. 彼女に情報を与えてくれるとされる instructor (communicator) は、イエイツを他のオカルト愛好家から遮断して、二人だけの世界を構築しようとしている。イエイツは、一連の作業が終わるまで、いかなる哲学書も読んではならないと命ぜられる。
2. 第三者によって、自動筆記が観察されるのを拒んでいる。これはイエイツの願いに反するものだけに余計疑わしいという。すぐれた心霊研究では、超常現象が起こったときは、中立的な観察者が必要とされるのをイエイツはよく心得ていた。
3. 自動筆記の内容に、個人的な事柄が入ってくると、instructor はいつもジョージの肩をもち、イエイツを批判した。

初のジョージの伝記を世に出した Ann Saddlemeyer は、多重人格障害の患者にとって、意識的なコントロールが困難であるのと比較して、ジョージの場合は、自己催眠にかけて、自動筆記の状態にはいるわけだが、それには集中力が必要で、イエイツ夫妻は、そういったトランス状態に入るための訓練が互いに来れていたのだとしている。また、意識のレベルは自動筆記を行っている最中にも、覚醒の度合いが高くなったり低くなったりで、自分が自動筆記をしているという感覚を持ちつつ、内容には介入できない場合もあるという。

要するに、両者とも、ジョージの意識的なコントロールによって、自動筆記の内容が作り上げられた部分がありうるとしている。Madoxの方が、作為性に比重がかかっている、つまり自動筆記は、ジョージがイエイツとの結婚生活を成就させ継続させるための戦略であり、イエイツは彼女が当初期待した以上にそれにのめり込んでしまったと考えているのに対し、Saddlemeyer は、意識的な部分と無意識的な部分が入り交じっているだろうと推測しているのである。僕自身は、暫定的にはあるが、ジョージの戦略的部分が相当あるのだということを認めつつ、*A Vision* へと組み込まれていく

system に関しては、彼女の過去の読書・研究内容が彼女の中で漠然と一つのものになりかけていたものが、イエイツの質問に答える過程で、一つの形をなしてきた、それは半ば無意識、半ば意識的なものだったのではないかと推測している。

新婚当初の集中的なセッションの間に、ジョージ（あるいは instructor）の語る内容には、重要な3つの概念が顕われてきた（註15）。

1. 文明は2000年単位で、一種の救世主が先触れとなって、動いていく。
2. 人間の人格の範囲は、月の28の相によって表現されうる。
3. 個人の魂は、一連の受肉、即ち輪廻によって、幼児の完全な客体性から、道化の完全な主観性へと移っていく。

こうした動きを説明する一つの手がかりとして、‘dreaming back’ への言及も出てくる。前述のように、‘dreaming back’こそは、浄化されていない魂が、この世に漂って、在世中の自分にとって印象的な場所で印象的な行為を繰り返す、生き直すという行為である。これが、最晩年の演劇『煉獄』でまさに劇化するわけだ。

しかしここで重要なのは、この世の一見ばらばらに見える現象の背後に、あるパターン、あるアイデアが存在するという世界観だ。A *Vision* のイエイツと『新生』のダンテに共通するのは、現世の個々の事象の背後にアイデアが存在し、それが現実の事物より大きな意味を持っているという考え方なのである。

こうして、夫婦の共同作業を土台として A *Vision* は出来上がる。1925年版の A *Vision* は305頁であるが、その元となった自動筆記は数千頁におよび、セッションは数百回におよんだのだ（註16）。

さて、イエイツの晩年の劇『煉獄』のいわゆる ‘dreaming back’ に関しては A *Vision* の Book III : The Soul in Judgment の V および VI に関連した記述がある（註17）。それによれば死と（再）生の間は6つの段階に分けることができる。その第二段階は ‘return’ と呼ばれるが、それが ‘dreaming back’ のことで、霊は、自分を最もゆり動かした出来事を何度も何度も生きなおさねばならないのである。霊は生きているときには、「殻（象徴的には肉体を意味する）」と「情熱体」というものが支配しているのであるが、この return、霊にとってもっとも痛切な出来事の生き直しを通じて、霊は殻や情熱体から離脱していくのである。

イエイツの『煉獄』は、明らかにこの世界観にのっとっており、従来のカトリックそしてダンテの煉獄観とは異なるものとなっている。

肝心なのは、煉獄に関する細かい教義的な差異ではなくて、イエイツがこの死後の霊に関する概念を夫人と共同作業を通じて作り上げ、ダンテは、当時、煉獄に関する言説が生まれて100年くらいの時点で、それを集大成したのである。

リアルな眼をときすませながら、リアルな事象の中に埋もれてしまわないためには、それこそ何らかのヴィジョンが必要であり、二人の偉大な詩人は、それを誰か、あるいは既存の体系に依拠するのではなく、かといってまったく独自の体系を空から生み出すのでもなく、それまではばらばらにあった諸要素を自らで編成してシステムを構築し、それと並行してその世界観・システムを詩や劇作品に

反映させたのである。

註

1. Petrocchi, Giorgio, *Vita di Dante* (Bari, 1993), p.18.
2. ル・ゴッフ, ジャック 『煉獄の誕生』 渡辺香根夫, 内田洋訳, 法政大学出版局, 1988年, p. 3, p. 6, p.500.
3. Maddox, Brenda, *Yeats's Ghosts* (New York, 1999), p.365.
4. Jeffares, A.Norman & A.S.Knowland., *A Commentary on the Collected Plays of W.B.Yeats* (London, 1975), p.276
5. Wellesley, Dorothy, *Letters on Poetry from W.B.Yeats to Dorothy Wellesley* (London, 1940), pp.194-195.
6. Ibid.p.195
7. Saddlemyer, Ann, *Becoming George: The Life of Mrs W.B.Yeats* (Oxford, 2002), p.29.
8. Ibid. p.38
9. Ibid. p.52.
10. Ibid. p.59.
11. Saddlemyer は前掲書の691頁の註196で, Ellmann の著した *The Man and the Masks* の1979年版の preface を引用している。その序文の中で, Ellmann は, ジョージは最初 fake の自動筆記をして, 後でそれを夫に話すつもりだったと述べているが, 現行の Norton papaerback 版 (1999) には, 1979年の preface は掲載されていないし, 結婚前後のミスリーディングな記述は, 訂正されぬままになっている。
12. Maddox, Brenda, *Yeats's Ghosts: The Secret Life of W.B.Yeats* (New York, 1999), pp.70-72.
13. この手紙を根拠に自動筆記が開始されたのを10月27日と考える研究者もいるが, イエイツ夫妻の後の記述をもとに10月24日に始まったと考える研究者もいる。
14. Maddox, Brenda, *ibid.* pp.73-93.
15. *Ibid.*, p. 84
16. Foster, R.F., *W.B.Yeats: A Life II: The Arch-Poet 1915-1939* (Oxford, 2003), p.110.
17. Yeats, W.B. *A Vision* (London, 1937), pp.223-233.

(つじ・まさひろ 経営学部教授)